

【講演要旨】

「がん患者さんの治療と生活を地域で支える」 ～がん患者さんの支援として、歯科に求められていることとは～

国立研究開発法人 国立がん研究センター中央病院
歯科医長 上野尚雄

日本人の死因のトップは1981年以降、脳卒中を抜いて「がん」がその地位を占めており、毎年33万人ががんで死亡しています。日本人の2人に1人はがんに罹患するという現在、がんは非常に身近な病気です。

がん患者さんには、治療中から終末期に至るまでの長い期間で、口腔内の様々なトラブルが高い頻度で出現し、そのQOLに大きな影響を与えることが知られています。このようながん患者さんに起こる「口腔の諸問題」には、歯科の介入が大きな支援になることがあります。がん医療の現場において、「食べること」「話すこと」は、がん患者さんの療養生活を豊かにする大きな柱の一つであり、「口腔ケア」「がん医科歯科連携」は、それを支える重要なキーワードとなっています。

平成28年12月、がん対策基本法が改定され、その全体目標には「尊厳を持って安心して暮らせる社会の構築、がんになっても自分らしく生きることのできる地域共生社会の実現」が追加されました。**がん患者さんの口腔の問題を解決するためには、その専門である歯科医療従事者の介入は必要不可欠**です。しかし、小さなお口の困りごとでも、がんであるという理由だけで地域の歯科での治療が受けられない、という事態がまだまだ散見されているのも事実です。がん患者が住み慣れた地域社会で生活をしていく中で、いつでもどこに居ても、安心して必要な歯科的支援を受けることができる地域共生社会の構築が強く求められています。

がん患者の口腔管理は、特別なことではありません。がん治療を受ける時には、歯科でのチェックを受け、必要な治療を済ませておく。がん治療中に口腔の問題があれば、地元の歯科医院でも相談にのってもらえる。**我々歯科医療従事者が、がん患者の口腔をしっかり支え、地域の歯科ががん治療のチームの一員になる。**そんな時代を迎えています。

今回の講演では、平成24年に周術期口腔機能管理としてがん患者さんへの口腔管理が保険収載されてから6年が経過し、日本のがん診療全体での動きはどのように変わってきたか、また当院でのがん医科歯科連携や実際の対応、トピックスについてがん患者さんのお口の事例を交えてお話しさせていただきます。